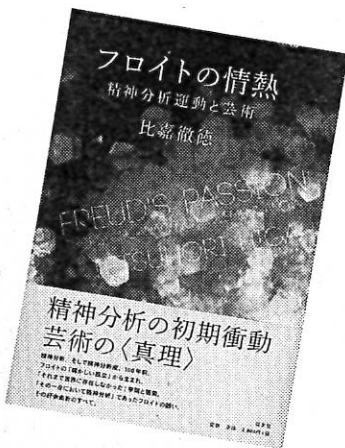


比嘉徹徳著『フロイトの情熱』(以文社)を読む



比嘉徹徳 著
▶フロイトの情熱
精神分析運動と芸術
11・25刊 四六判258頁 本体2600円
以文社

フロイトは、反復が継続することを望んだのだろうか？

モーセとフロイトの関係という問題を、類書になく深く掘り下げる

新宮一成

書き終わる時になつてから、人は初めて本に序文を付けるものなのだろう。だから序文には、ものごとの順序などと言われるものとはまるで反対に、先に結論が現れることがある。そして幸いな場合には、そこにすでに、その本の根本的な洞察がさらりとたたためられており、読者は早くもそこで読書の醍醐味に触れることになる。

この本の場合もそうである。それは、精神分析の究極の構造が、「反復」ということにあるとする命題である。ところが、我々は、反復を究極とするような構造は、シニウムに触れるものであることを、すぐに感じ取らずにはいられないだろう。「反復に過ぎない」といふ言葉は虚しく響く。それでも人は、反復に過ぎないものを、情熱的に行うのである。なぜだろうか？ とどんな必然が、人にそれをさせるのだろうか？ こんな疑問が、この本を読み進む動機になることであろう。

しかし、序文で根本的な洞察が書かれているとしても、それはしばしば、著者の頭にいきなり閃いたものであり、本の内容と、一見繋がっていないこともある。そうなる読書の楽しみは、本の中にずっしりと詰め込まれている各章の重みの中を旅するうちに、無関係に見えていた序文の命題が、著者と同様、ふと読者の頭の中をよぎるのを待つことになるだろう。

フロイトは、精神分析は「反復強迫」を招き寄せるといふ重大な事実が付いて、こ

れは人の「死の欲動」と結びついたものであって、治療に抵抗するものだと考えたから、この「反復強迫」を克服する方途はあるのかどうかというのを気にかけた。しかし、後の人はどうだろう。フロイトによって、精神分析という作業に仕込まれたと、それがまさに「反復すること」なのであるとすれば、「反復せよ」という声が精神分析を導いていると考えて、あえて反復に沈潜してみることがあるのではないか？

そこに本書の著者の閃きもあつたのかもしれない。すなわち、各章を書き進めている間に、フロイトの情熱を、自ら反復しているということに戦慄した。そのとき著者はこの本の根本命題となるものに出会い、反復を強いるようなフロイトの思考の形式そのものを受け継いだ。本書の筆は、こうして優れて精神分析的に進行したように見える。

「情熱」とは「パトス」であり「病」であり、「受動的に」何かによって、「つまり反復の力によって、精神が」とらわれていることを意味する。フロイトもまた、何かを反復したいという情熱に囚われていたのである。「反復」こそ、「情熱」に最もふさわしい構造ではなからうか。もし本を書くことも何かを反復することだとしたら、そこにこそ、フロイトについての本を書くというこの正統な意味があるわけである。

フロイトについて書かれた本を読むということが何かを反復することであり、フロイトについての本を書くということも何かを反復していることであり、そしてフロイトもまた何かを反復していた。では、根本のフロイトは何を反復していたのだろうか。そして、意図しないまま、あるいはある意図をもって、後世の人々に何を反復させることになったのだろうか。

フロイト自身もまた、執筆

という行為の中で反復の原点にあるものを探っていた。とりわけそれは、モーセを巡る晩年の彼の思考に現れているのである。本書の序巻は、これまでの研究書ではえてして抽象的な類推でつませられがちなのモーセの問題を取り上げた最終章である。さきほど「重み」と書いた理由もここにあり、フロイトは、反復が継続することを望んだのだろうか？ 精神分析運動の形で。そして、本が書かれ、読まれるという関係的な行為の中で、何か反復されれば、それはフロイトの情熱そのものなのだろうか？ 本書が、モーセとフロイトの関係という問題を、類書になく深く掘り下けているのは、まさにフロイトの情熱がそこであり、反復の原因らしいものが、そこに潜んでいるように著者には思われたからなのである。歴史的真理、ふと漏らされたかのようなフロイトの言葉が、その原因に向かつての読書に、導きの糸を差し出している。

(京都市立大学大学院人間・環境学研究科教授)